

## 来し方をふり返って

教育・昭和 51 年卒・土井 晴美

「おまえはまだ先生としたらひよこや。でも、親ごさんも子どもたちもおまえを一人の立派な先生として頼ってくるんやぞ。しっかりと自分をもっとかないかんぞ。」

父親のこんな励ましの言葉を背に、真新しい黄緑色のスーツを着、桜の花が満開の丸亀城下の小学校の門をくぐったのがつい昨日のこのように思い出されます。

その学校で初めて担任したのは、2年2組のととてもかわいい47名の子どもたちでした。共に笑い、共に泣き、共に考え、共に歌い、共に泳ぎ、共に走り・・・大変充実した日々を過ごすことができました。

そんなふうな出会いや別れを繰り返しながら、私は、今年（平成23年）の3月31日をもって、35年間の教員生活にピリオドを打ちました。

「子どもが好き！」その一念で、教員になろうと決意し、香川大学に入学したのが昭和47年ですから、もう40年も昔のことになってしまっています。

当時の国語科研究室は、体育科研究室と共に、新しい校舎内にあり、他の研究室の学生たちからは、ずいぶんうらやましがられていたものです。私は、作文教育ゼミに入り、夏には岡山県の湯郷で開かれた合宿に参加し、その地域の子どもたちと交流したことを覚えています。卒業論文には、「樋口一葉」を選び、才能があるのに極貧の中で夭逝した彼女のことを想い、涙したものです。また、サークルは、4年間茶道部に所属し、石州流をじっくり学びました。お点前をしている間の静寂な時間は何とも言えず、心が洗われる想いがしたものです。

しかし、何と言っても、私を「絶対に先生になるんだ！」という強い思いにさせてくれたのは、附属小学校で、4回生の時に行った教育実習でした。5月から6月の6週間、元気で愛らしい1年西組の子どもたちと過ごしました。その間、多くの先生方の授業を見せていただいたり、講話を聴かせていただいたり、また授業をさせていただいたりその指導を受けたり等々、教員になるための様々な勉強をしてきました。その時の、「昭和50年度教育実習録（小）」は、今も私の手元にあり、大切な宝物になっています。教職に就いて、授業が思いどおりにできず心が折れそうになった時、この教育実習録をよく読み返しました。それは、教員をめざして奮闘努力していたあの頃の私に戻らせてくれ、また私にファイトを与えてくれたりもしました。

小さい頃からの夢だった教員になり、大好きな子どもたちと毎日接することができ、私の持てる力を十二分に出し切った35年間でした。何より毎日健康で仕事ができただけは、本当にありがたかったと想います。「教職は私にとって天職だった。」とつくづく感じる今日この頃です。

